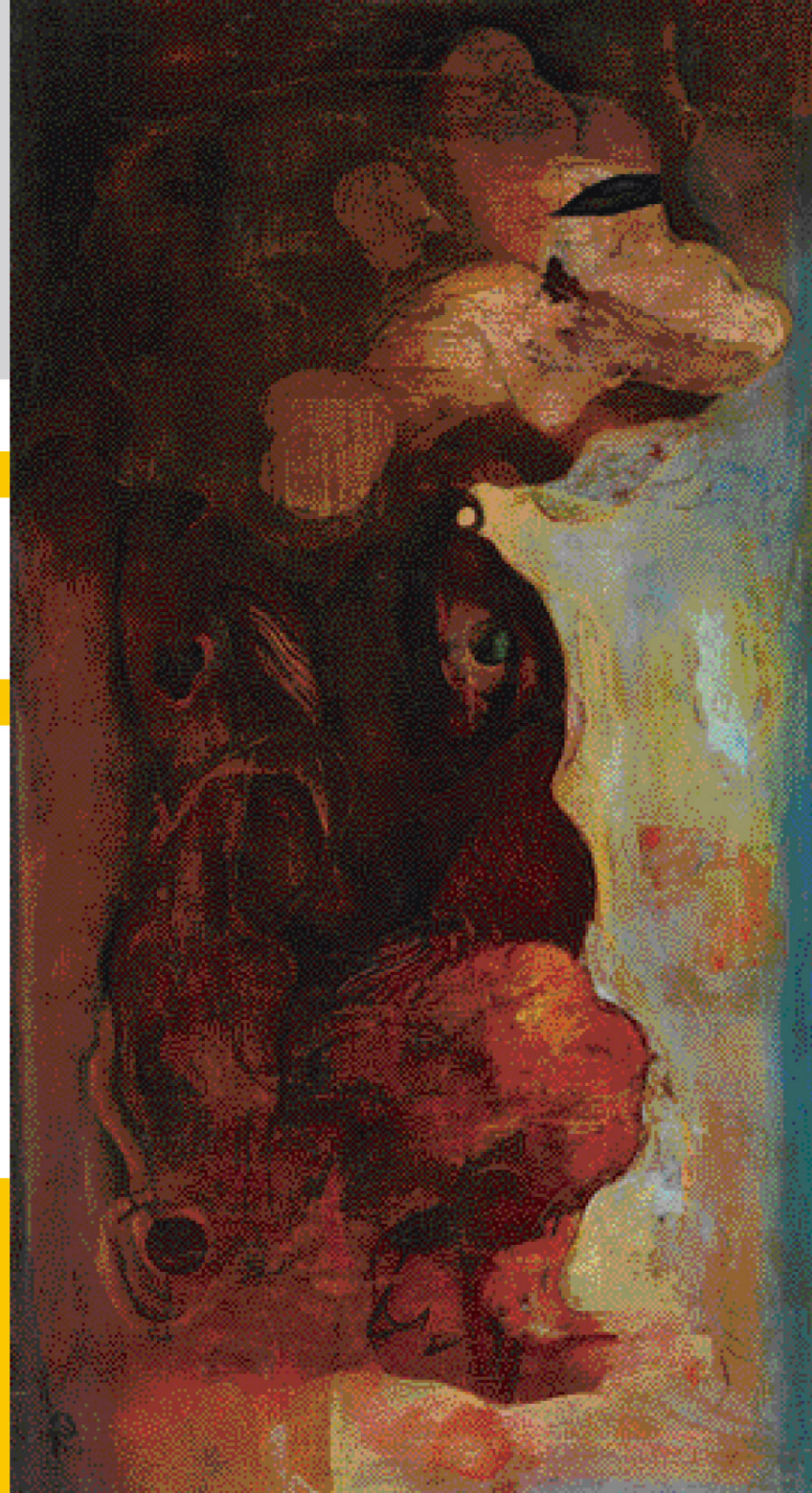




見るために私は目を閉じるのです  
ポール・ゴーギャン

I shut my eyes in order to see  
Paul • Gauguin

## 第90回独立展地方巡回展(予定)

### ■京都展

京都市京セラ美術館  
2023年12月5日(火)－10日(日)

### ■中部展

愛知県美術館  
2024年1月10日(水)－14日(日)

### ■大阪展

兵庫県立美術館 王子分館 原田の森ギャラリー  
2024年3月19日(火)－24日(日)

### ■北海道展

北海道立近代美術館  
2024年3月23日(土)－31日(日)

### ■福岡展

福岡市美術館ギャラリー  
2024年4月9日(火)－14日(日)

## 第91回独立展 予告!

2024年10月16日(水)－28日(月)  
国立新美術館  
搬入日/10月3日

## 独立春季新人選抜展 予告!

2024年3月25日(月)－31日(日)  
東京都美術館



詳しくは独立展ホームページまで！  
▶<http://www.dokuritsuten.com>

## 独立ノート第12号

発行日/2023年10月1日 発行者/独立美術協会

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-13-8-507  
Tel.03-3490-5881 Fax.03-6420-0026  
E-mail.dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp  
URL.<http://www.dokuritsuten.com>

印刷/エーワンネットワーク・デザイン/八武崎勢津美

### ー編集後記ー

表紙「眼のある風景」は、得体の知れない存在感で迫ります。見つめているのは何でしょうか。ウクライナ侵攻も2年目となり、不穏な状況を凝視している目のようにも思えます。コロナ禍は、マスク着用が任意になったことで収束への気配を感じますが、どんな状況でも創作への熱意を信じてほしいものです。今年は独立90周年記念として「輝く日本油画」展の企画、独立ノートも増ページとなり編集室一同頑張りました。



## 独立美術協会小史

**【誕生—初期】(1930—1959)** 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えらる。第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

**【中期】(1960—1984)** 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

**【現在】(1985—)** 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化していった。独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。



## 独立ノート第12号

発刊にあたり

ここ三年半あまりのコロナ禍の中、めげず元気に制作にお励みのことと存じます。

本年、創立90周年を迎えましたが、独立展は皆様の熱いところざしで素晴らしい発展を遂げて参りました。この様な中、独立ノートは皆様と会との絆が深まり、共に我が国の文化の舟の舳先となるべく、進取の気性を育て、今後の制作の一助となることを願っております。

事務所委員 絹谷幸二

### 目次

|                    |     |
|--------------------|-----|
| ❖ 独立美術協会小史         | 表紙裏 |
| ❖ 独立ノート第12号発刊にあたり  | 1   |
| ❖ 独立レジェンド／靄光       | 2   |
| ❖ 独立キーパーソン／奥谷博     | 4   |
| ❖ 独立90周年記念写真集      | 6   |
| ❖ アトリエ探偵団／木津文哉     | 12  |
| ❖ 海外滞在記／橋本大輔       | 14  |
| ❖ 海外滞在記／児玉沙矢華      | 15  |
| ❖ 独立ホットニュース        | 16  |
| ❖ 独立人—ひとりたつひと—／中嶋明 | 17  |
| 第90回独立展地方巡回展予定     | 裏表紙 |
| 第91回独立展予告          |     |

制作:独立ノート編集室

阿部栄一 井上達也 加藤啓治 児玉沙矢華 島崎陽子  
高橋雅史 津川めぐ美 松原潤 輪島進一

協力:画像提供／奥谷太一 千葉光 画像協力／和田道雄

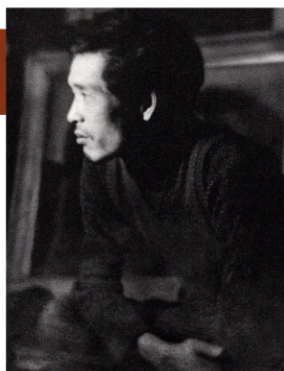
表紙:靄光「眼のある風景」102.0×193.5cm 1938年 東京国立近代美術館収蔵  
<令和5年度 国立美術館巡回にて展示>

# 個性を貫く 異端の画家

## 顰光

 あいみつ  
AIMITSU

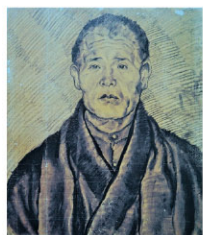
自己変革のたゆまぬ持続こそ彼の創造活動のやり方だった。



「顰光と交友の画家たち」  
図録2001年発行  
広島県立美術館／掲載p4

1907年(明治47)、広島県北広島町に農家の次男として誕生。本名は石村光郎。最初期の作品「父」は10歳の時と伝えられ非凡な描写力を見せている。高等小学校卒業後、広島や大阪で絵を学んだ。この頃より顰川光郎と名乗り、後に顰光と言われるようになる。17歳で上京し、谷中の太平洋画会研究所で学ぶ。住まいを池袋モンパルナスなど転々としながら制作活動も発表活動も旺盛だった。表現は試行錯誤が続いたが、その才能を高く評価したのは独立展の前身である1930年協会で、奨励賞、協会賞と受賞を重ねていった。やがてクレヨンやガッシュをロウで混合するなど様々に工夫し、独自に生み出したのが「ロウ画」である。その表現には、塗る、削る、

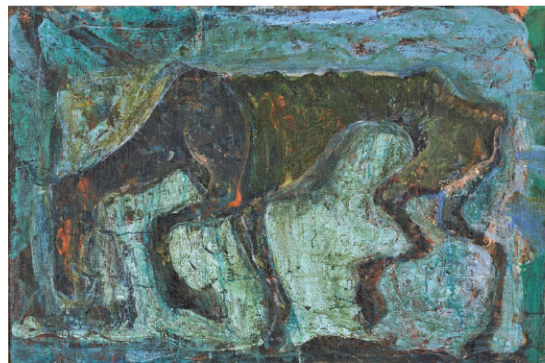
拭き取る、という行為を通して存在のリアリティを掘み取ろうとする執念の眼差しが感じられ、モチーフとしたライオンは塊としての迫力を突出させていく。更に1930(昭和5)年創立の独立展を発表の場とし、彼の独創性が開花していく。この頃聾啞学校の教師をしていた桃田キエと結婚。そうして1938年(昭和13)第8回独立展へ出品した「眼のある風景」で独立賞受賞。このように独立展で高い評価を得た作品だったが、世の中に認められるのは敗戦の混乱期を経てのことである。この作品は日本のシュルレアリスムの一つの到達点と云われ、日本洋画史の代表的な作品として今なお燦然と輝いている。



「父(石村初吉)の像」  
52.2×44.6cm  
1917年 個人蔵  
図録2001年発行:  
広島県立美術館／掲載p25



「コミサ(洋傘による少女)」  
80.0×65.0cm  
1929年 広島県立美術館収蔵

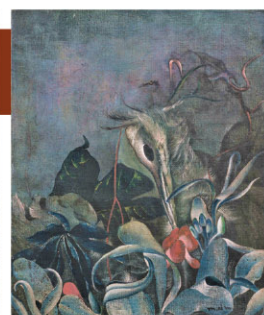


「馬」96.4×141.0cm 1936年 東京国立近代美術館収蔵  
Photo: MOMAT/DNPartcom

1939年(昭和14)、福沢一郎が独立美術協会を脱会し、美術文化協会を結成。顰光も参加していくが、戦時下の厳しい弾圧で前衛的な作品制作が困難になっていく。そうした状況乗り越え、更に麻生三郎や井上長三郎らと「新人画会」を結成し、発表を続けて行く。この間の代表作は3点の自画像であり、何かに立ち向かうように彼方を見据えていて、社会と個人の間の激しい葛藤の末の姿とも想像される。最後の自画像を発表した時は戦場に就いて



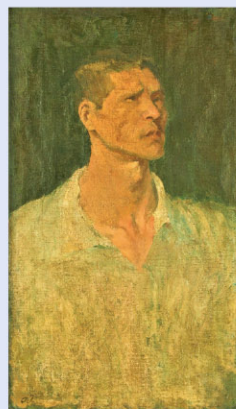
「二重象」24.5×20.0cm  
1941年 広島県立美術館収蔵



「鳥」45.4×37.9cm  
1942年頃 宮城県美術館収蔵

いたが、間もなく発病、1946年(昭和21)に上海にて戦病死。39才であった。時代が良かったならば、力強く輝き期待を寄せられる存在だったであろう。

## 「夫・顰光のこと」 石村キエ



「自画像「白衣の自画像」」79.5×47.0cm  
1944年 東京国立近代美術館収蔵  
Photo: MOMAT/DNPartcom

…略…

石村は出征の前年の中国旅行から帰ると、毎日大忙しで、絵を描き始めました。中国でかなりの人物を描いてから、絵に対する自信がむくむくと沸いてきたように思われました。自分ではある種の運命の予見をひしひしと感じてきたのだと思います。当時、私は体の具合が悪く、石村とすれば女房にいつまでも働かせるわけにもいかないと、中国で絵を売って400円程の大金を持ち帰ったのが、最初で最後の収入でした。貧乏はしていても絵の具は舶来の一級品しか使わず、私の収入で買うのも気がひけたのでしょ。

…中略…

出征の日、夕方7時の汽車で赴任することになっていました。ところが、朝早くに家を出て、新橋・第一ホテルに友人を訪ねると、行ったきりお昼を過ぎても帰って来ません。私は心配になってホテルを訪ねました。すると部屋には石村の姿はすでになく、友人の石橋さんが、部屋に散らばった絵の具を片付けていました。「いままで絵を描いていたよ。ひと足違いで帰ったばかりだよ」と淡々とした表情で告げるのです。戦争にとられる直前まで、石村は絵筆を捨てられなかったのです。そこで描いていた絵がなんであるかは、いまもって私にはわかりません。一瞬、呆然と立ち尽くしてしまった私は、急ぎ家に戻ったことをはっきりと覚えてます。石村の心を思うと胸が強く締め付けられ、悲しくなっていました。

—引用・出典文献— 「顰光—青春の光と闇」展図録p133より  
発行:1988年 練馬区立美術館 編集:土方明司 大井建地

## ●「令和5年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち —名作でたどる日本と西洋のアート—」

2023年9月30日—11月19日 高松市美術館にて展示



「眼のある風景」

神奈川の葉山を訪ね、漆黒のアトリエの素晴らしい佇まいに圧倒されました。ご多忙の中、先生から独立90周年への思いなどをお伺い出来ました。

## 奥谷博が語る

おくたに ひろし

Hiroshi OKUTANI



- 1934 高知県宿毛市に生まれる
- 1963 東京藝術大学美術学部専攻科(油画)修了 大橋賞
- 1965 第33回独立展／独立賞・須田賞
- 1966 第1回昭和会展／昭和会賞 独立美術協会会員推挙
- 1967～68 第1回文部省芸術家在外研修員として渡欧
- 1971～73 渡仏
- 1983 第33回芸術選奨文部大臣賞
- 1984 第3回宮本三郎記念賞
- 1995 第18回安田火災東郷青児美術館大賞
- 1996 第52回日本藝術院賞 日本藝術院会員就任
- 2007 宿毛市名誉市民 文化功労者顕彰  
世界遺産条約採択35周年記念奥谷博展  
一訪ねた世界遺産／パリ・ユネスコ本部
- 2012 世界遺産条約採択40周年記念最終会合における  
奥谷博作品展示／国立京都国際会館
- 2017 文化勲章受章
- 2019 近代日本藝術の100年  
日本藝術院創設百周年記念展／日本橋・三越

### 独立美術創立の志

一度耳にすると忘れない名前、独立美術はどのような思いで生まれたのか、東京藝大助手の頃、恩師で創立会員の一人でもある林武先生に尋ねたことがありました。ある日、教授会でお疲れになったのか、教官室に行くと先生がモデル台に寝そべっておられ、僕は脇に置いてあった独立展のカタログに気づいてその由来を尋ねました。1930年協会からの独立、二科会からの独立、既成画壇からの独立、フランス美術からの独立という四通りの答えが考えられるけれど、林先生は当時の日本がすべて西洋からの輸入であって、フランス美術に100年以上も追随している状況から独立し日本の油画を確立するという考え(フランス美術からの独立)を強調されていました。独立というとフォーヴィズムの団体とされていますが、当時はフォーヴ・キューブ・シュールが混成しており、多様な活気に溢れ「西洋の物質と東洋の精神の融合、洋画の新しい技法の発見」など、日本的なものへ昇華してゆく気運も高まっておりました。幾多の反論・分裂も越え、日本の洋画の理念が受け継がれてきたのは感慨深いです。

### 独立の思い出

独立は今年で90周年を迎えますが、独立80年史と70回記念展でカタログ「輝け 日本油画」(朝日新聞社編)を製作した事業は大きな思い出です。カタログ製作の多額の費用捻出のため、作品が掲載されている皆さんにはデッサンを3枚描いてもらい私が箱書きをして販売したところ、即日完売でした。又、朝日新聞社のお力添えで創立会員を含む作品の借用など大変な労力と展覧会場である高島屋さんのご協力で1日に約5000人が入場してくれました。そして80回記念展に向けて「輝け-独立美術」では3年がかりで展覧会場を三越さんにお願ひし、会員の皆さんに描いてもらったテーマ作品は大村智先生に購入していただきました。現在は蕨崎大村美術館に展示されているようです。80年史の編集は評論家の方々のご協力、編集委員皆様の労力によってできました。100周年の時には盛大にやってほしいね。



パリにて



藝大空手部時代「観空大」の演武

### 藝術無終

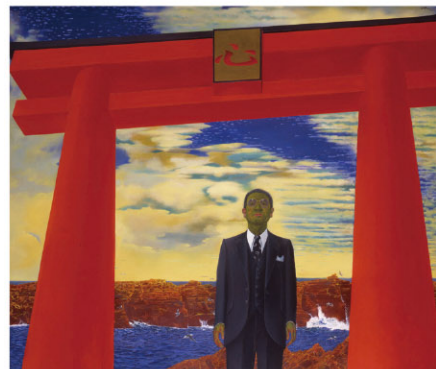
50代半ばの頃、閃き生れて来た言葉ですが以来、私の座右の銘としています。藝術の迫及は常に未完であるが、自分の生きた証や生き甲斐、生きる源になるという考えから確立した言葉です。完成した作品を見ていると不満が出てきて次から次へと直したくなってくるんです。レオナルド・ダ・ヴィンチも似たことを言っているようなのですが、作家の多くはそういった考えを持っているのではないのでしょうか。



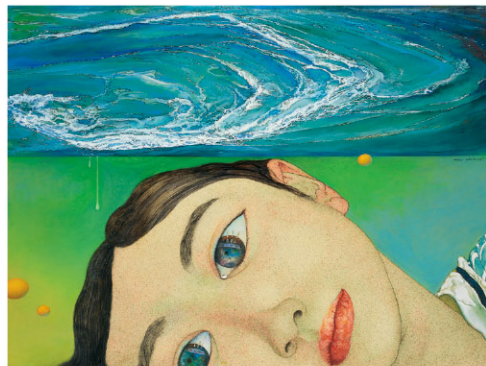
アトリエ外観(設計:柳澤孝彦)



「坂ノ下天満宮の狛犬」  
54.2×36.5cm ガッシュ  
1953年



「芽出度い日」191.0×227.0cm 1990年



「白昼夢」193.9×259.1cm 2017年

### 自分を貫く

藝大助手の頃、島村三七雄先生から壁画科の授業で学生に見せるためにフレスコの模写を頼まれ、いやいやウッチェロ作「サン・ロマーノの戦い」(300号)を模写しました。2年かかりました。でも、この制作がその後の油画でも厚塗りから薄塗りで部分を細密に描きながら全体に広げていく技法に変化するきっかけになったんです。藝大で一番勉強できたことでした。その当時、独立の先生方からは元の厚塗りに戻してはどうかと言われましたが、林武先生は理解してくださっていました。自分の考えを貫いたことが納得できる画風に繋がったと思っています。先輩は若い人の絵を批評する時に対等の作家としてじっくり絵を観てあげてほしいと思います。これからの独立に期待することは何人かの若い人が育って、会を牽引し盛り上げ続けていってもらいたいことですね。

### 笠間日動美術館に奥谷博記念室を開設

本年4月1日(土)、日本館(旧パレット館)5階に奥谷博の作品を常設展示する部屋が開設されました。1966年、第1回昭和会展において昭和会賞を受賞されて以来、同館館長であり日動美術財団代表理事の長谷川徳七氏との深い交友が記念室開設として結実されました。1955年作「二十歳の自画像」から2021年作「底力」までの代表的な作品を集め、長年にわたり日本洋画界を牽引する奥谷藝術の画業を観ることが出来ます。多くの来場者が心豊かになってもらえる部屋、半永久的な場としてさらに発展していくことを願ってやみません。



### 笠間日動美術館

〒309-1611 茨城県笠間市笠間978-4

TEL0296(72)2160 ・9:30～17:00(入館は16:30まで)



①



⑥



⑦

今回の展覧会で90回目を独立展は迎えた。今号のノートではその流れを振り返り特集を組んだ。写真を通して会に携わった方々を紹介する。

①画面左より児島善三郎、林 重義、伊藤 廉、福沢一郎、川口軌外、鈴木保徳、清水登之、三岸好太郎、里見勝蔵、前列左より、2名挟んで高島達四郎、中山 巍、小島善太郎、鈴木亜夫

②煙草を吸う林 武 ③島村三七雄 ④小林和作 ⑤野口弥太郎

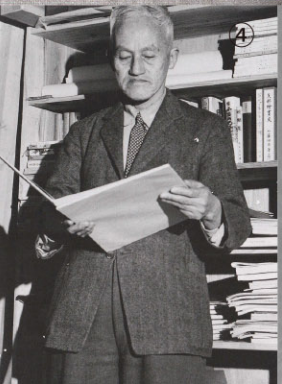
⑥東京都美術館前での独立会員(1970年) ⑦須田国太郎と芝田 耕 ⑧菅野圭介と三岸節子 ⑨池島勘治郎。系列地方展である関西独立展を創立 ⑩鳥海青児 ⑪海老原喜之助



②



③



④



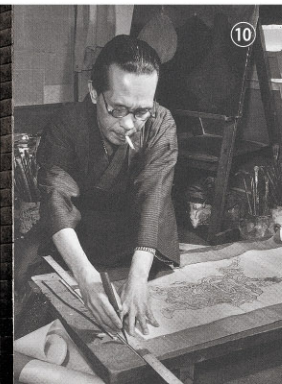
⑤



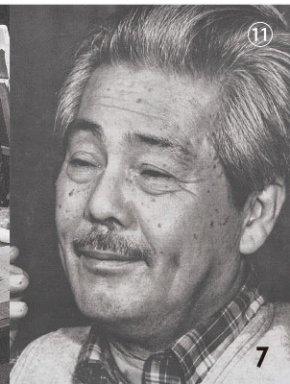
⑧



⑨

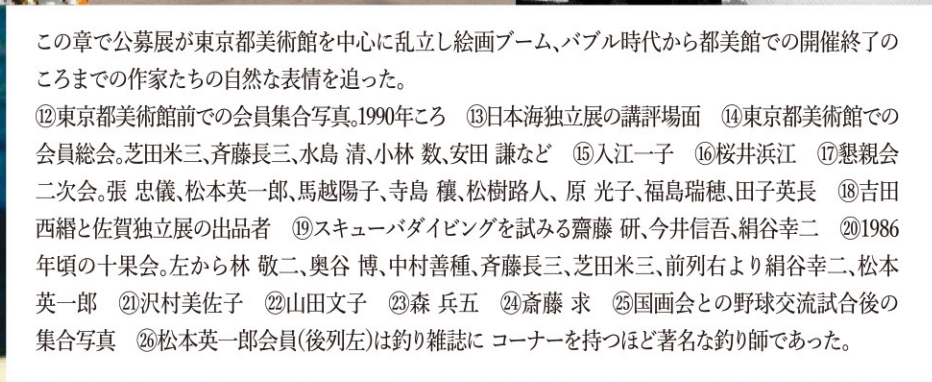


⑩



⑪

7



この章で公募展が東京都美術館を中心に乱立し絵画ブーム、バブル時代から都美館での開催終了のころまでの作家たちの自然な表情を追った。

⑫東京都美術館前での会員集合写真。1990年ころ ⑬日本海独立展の講評場面 ⑭東京都美術館での会員総会。芝田米三、斉藤長三、水島 清、小林 数、安田 謙など ⑮入江一子 ⑯桜井浜江 ⑰懇親会二次会。張 忠儀、松本英一郎、馬越陽子、寺島 穂、松樹路人、原 光子、福島瑞穂、田子英長 ⑱吉田西緒と佐賀独立展の出品者 ⑲スキューバダイビングを試みる齋藤 研、今井信吾、絹谷幸二 ⑳1986年頃の十果会。左から林 敬二、奥谷 博、中村善種、斉藤長三、芝田米三、前列右より絹谷幸二、松本英一郎 ㉑沢村美佐子 ㉒山田文子 ㉓森 兵五 ㉔斎藤 求 ㉕国画会との野球交流試合後の集合写真 ㉖松本英一郎会員(後列左)は釣り雑誌に コーナーを持つほど著名な釣り師であった。





26



30



31



27



33



34



28



29



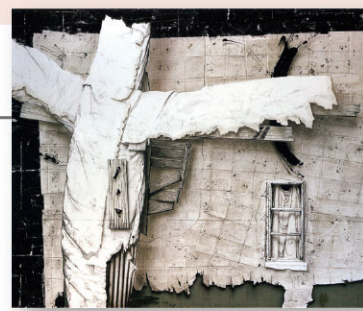
35

②6 東京都美術館での最後の審査後の集合写真 ②7 国立新美術館での記念行事。スクリーンに創立会員 ②8 会員によるギャラリーツアー ②9 新美術館移転後の授賞式 ③0 新美術館の会場風景。ゆったりと鑑賞出来るようになった ③1 会員新年会 ③2 系列地方展の一つ関西独立展の懇親会 ③3 北海道展の出品者集合写真 ③4 席間の距離とマスクでのコロナ禍対策、独立展会場内の授賞式 ③5 搬入作業もマスク着用にて行われた。

さいたま市在住の、木津文哉会員のアトリエを訪問させて戴いた。大学院修了と同時に現在に至るまで大学の教職一筋の木津会員、「アトリエは作品を生み出す子宮のような処だ」とおっしゃる。アトリエの建物内部は、イーゼル、テーブル、ラックに至るまで殆どが手作りである。ここで生み出される作品は絵画のほか多岐にわたるが、先ずは制作に必要な道具を作るところから始めるとのこと。専門的な機械・工具類はそのために必要なのだ。凝り性で、子供の頃からモノ作りが好きだった「秘密基地」のような世界(工房)がここにあった。



学生時代の写真より  
同級生(右)と共に



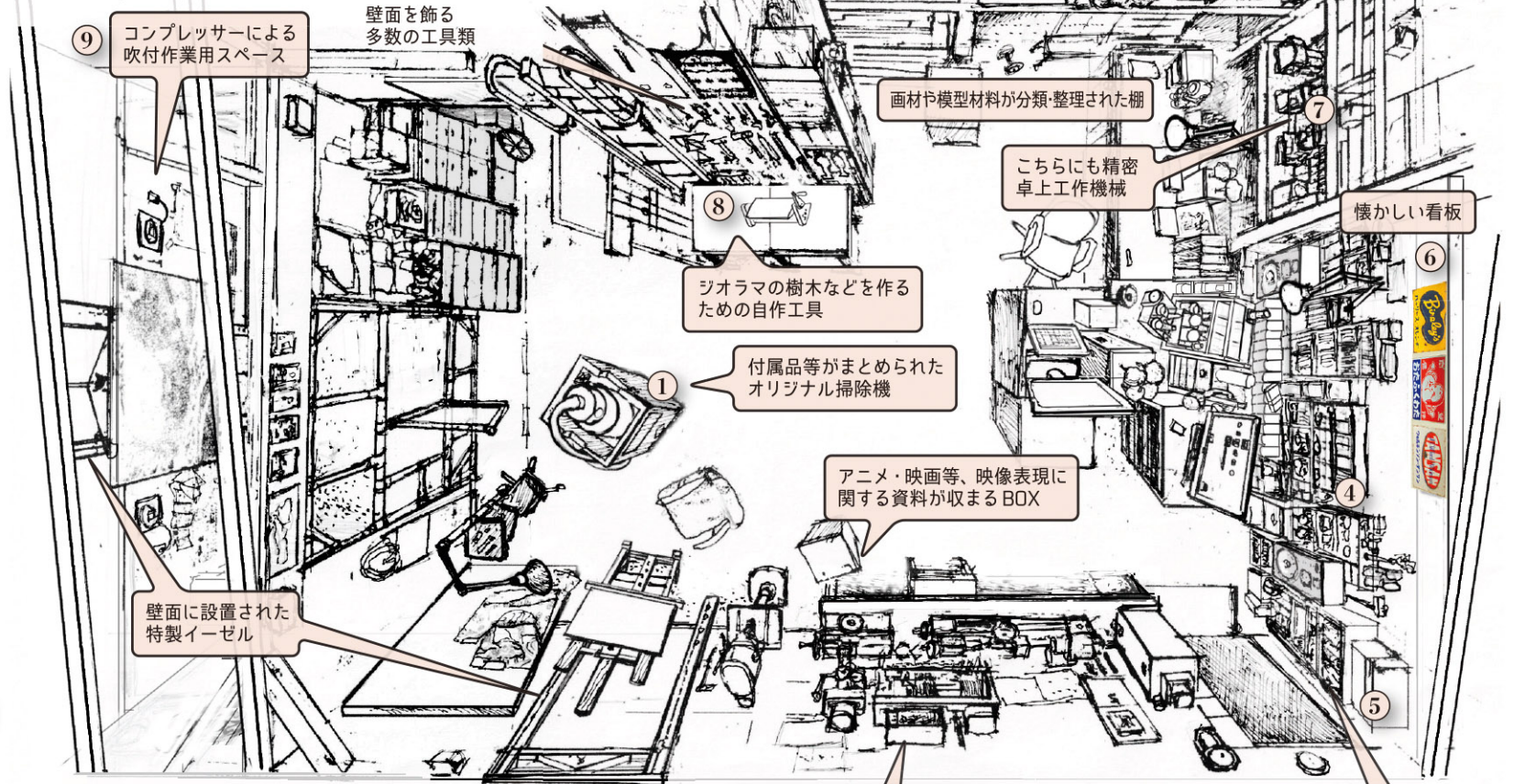
「殉教者」162×194cm ミクストメディア 1993年  
第60回独立展/独立賞・第60回記念賞受賞作



「岐」162×194cm ミクストメディア 1994年  
第37回安井賞展/佳作賞受賞作



「雲塊」172×158cm ミクストメディア  
2022年 第44回十果会



#### 略歴

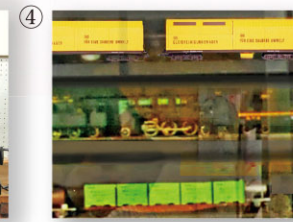
1958 静岡県浜松市に生まれる  
1985 東京藝術大学美術学部美術研究科修士課程修了  
1985 東京セントラル美術館油絵大賞展/佳作賞受賞  
1986 第6回富嶽大賞展/奨励賞受賞  
1992 第60回独立展/独立賞・60回記念賞受賞  
1993 第61回独立展/独立美術協会会員推挙  
1994 第37回安井賞展/佳作賞受賞  
1996 第31回昭和会展/優秀賞受賞  
1999 現代日本絵画の展望展/特別賞受賞  
現在 独立美術協会会員、東京藝術大学美術学部教授



制作する際に装着する  
特製作業バッグ  
マスキングテープなどが取まる



精密卓上フライス盤など



HOゲージ鉄道模型コレクション



シューズボックスのブーツ

滞在期間

2016年2月20日～3月18日

## 橋本 大輔



「春の蟬」S100号 2015年

- 1992 茨城県生まれ
- 2011 第79回独立展初入選(以後毎年)
- 2015 第17回雪梁舎フィレンツェ賞展/フィレンツェ美術アカデミア賞受賞  
第83回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
- 2017 第52回昭和会展/優秀賞受賞  
現代の写実—映像を超えて(東京都美術館)
- 2018 第10回前田寛治大賞展/佳作賞二席
- 2019 アートオリンピア2019/学生部門一位、  
保科豊巳賞受賞
- 2020 東京藝術大学美術研究科博士後期課程芸術  
学専攻美術教育修了博士(学術)
- 2021 上田薫とリアルな絵画(茨城県近代美術館)
- 現在 独立美術協会会員



アカデミアの助手と橋本



◀絵画アトリエバルコニー



アカデミアの中庭▶

### ■きっかけ

私は、第17回雪梁舎フィレンツェ大賞展にてフィレンツェ美術アカデミア賞を受賞し、約1か月間フィレンツェを中心にイタリアに滞在しました。これは、コンクールの副賞として渡航費、1か月の滞在費の一部、宿代をいただき、その間自由に現地を見て回れるというものでした。

### ■思い出

Accademia di Belle Arti di Firenzeという学校(ダヴィデ像のあるところ)の聴講許可をいただき、授業や修了制作の講評などに参加させていただきました。イタリア語は全然できなかったのですが、英語で話せる人に聞いたり、日本人で留学している方に内容を教わったりしました。授業のほかには美術館を回ったり、助手の方のアトリエを訪問したりしました。遠出してローマやヴェネツィアに行ったり、ベルギーまで行って「ゲントの祭壇画」を見たりもしました。



修了制作展の様子▶

### ■これから海外に行く人へ

私の体験は留学というよりも副賞での滞在というのですが、貴重な経験ではあったと思います。正式な留学や在外研修にここから繋げていきたい場合、推薦者や受け入れ先の確保にも尽力されるといいかと思います。海外滞在支援のあるコンクールの挑戦など、ぜひきっかけを掴んでください。



▲絵画アトリエ

滞在期間

2023年2月28日～3月30日

## 児玉 沙矢華



「君は雲の旅の様」S100号 2019年

- 1986 東京都生まれ
- 2005 第59回女流画家協会展初入選(以後毎年、'12女流画家協会賞受賞)  
第73回独立展/初入選(以後毎年)
- 2010 東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了
- 2015 第50 回昭和会展招待作家(日動画廊)
- 2016 ギャラリースタッフセクション#57  
児玉沙矢華展(相模原市民ギャラリー)
- 2018 第86回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
- 2019 第21回雪梁舎フィレンツェ賞展/  
フィレンツェ美術アカデミア賞受賞
- 現在 独立美術協会会員、女流画家協会委員、  
玉川大学講師



丘の上から

### ■きっかけ

以前より独立展の先生方、絵描き仲間から、留学体験談やイタリアの滞在体験談を伺う機会があり、海外滞在は憧れでした。ちょうど独立賞を受賞した翌年に、第21回雪梁舎フィレンツェ賞展に入賞し、滞在支援をいただくことができました。様々な方の「勢いの波に乗る」というご助言のおかげで挑戦できたのだと思います。

### ■活動内容

観光と異なる経験をしたと思い、33箇所ほどの芸術文化施設等の訪問、スケッチ、現地の人との交流を中心に、フィレンツェ美術アカデミアで「絵画」の聴講を行いました。授業の聴講では、観察方法を見直し、発想力の訓練になるようなドローイングを体験しました。目を瞑って記憶の中のモデルを描くというように、描く側の認識や観察力と向き合う点が興味深いです。



▲現地調達した画用紙に風景スケッチ

### ■思い出

イタリア人画家と交流し、Andrea del Sartoの作品を中心にフィレンツェ案内をしていただいたり、アトリエに遊びに行ったりしました。「日記のようにその日の感情を積み重ねる」など、絵描きとして共感できる話ができると嬉しかったものです。



◀授業でのドローイング



画家のアトリエの窓から▶

### ■これから海外に行く人へ

絵画について話ができるようにしておくことが良い準備になります。私は自分の作品について言語化して発表することや、様々な体験談を伺っていたことが役立ちました。ぜひ人と交流する中で、絵の見え方や考え方が広がるような経験をしてほしいです。

※ 雪梁舎フィレンツェ賞展は、50歳以下の具象系絵画を募集する雪梁舎美術館開催(公益財団法人美術育成財団雪梁舎主催)のコンクールです



## 独立展90周年記念

## 奥谷 博・絹谷 幸二によるビッグ対談

2023年10月22日(日) 14:00~15:30 展示室2

テーマ「独立の昨日・今日・明日」—DOKURITSU・LERI・OGGI・DOMANI—

## 「輝く日本油画 独立美術協会90周年記念展」

## ■日動画廊展

2023年11月2日(木)~14日(火) 10:30~18:30 最終日17:00まで 日曜休廊

## ■三越展／日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

2024年2月7日(水)~12日(月) 最終日17:00まで

## 第90回独立展より、新たに三つの賞が設置されます

【協会賞】：独立賞の次へ並ぶ賞とします。

【U35賞】：35歳以下の作家を対象とします。

【石井賞】：新たに設置される個人賞です。

故石井武夫氏は、1981年から独立美術協会会員として活躍されるとともに、筑波大学教授、大阪芸術大学教授を歴任され、温かい励ましの言葉で後進の指導にあたられました。「人間とは何か」というテーマをダミーに託した多くの作品は、見るものを惹きつけて止みません。



「アトリエのモデル達」200号の前にて

## 輝け原石！2023独立春季新人選抜展

2023年3月25日(土)~31日(金) 東京都美術館

独立展の将来を担う優秀な出品者による今回の新人選抜展は、準会員と第89回展受賞者・賞候補者・初入選者および会員により推薦された出品者、261名により開催されました。初の試みとして60号までの新作を出品規定とし、壁の全面を活かした展示は出品者の熱気が伝わってくる見ごたえのあるものでした。展示について賛否様々など意見がありましたが、挑戦を続ける独立として今後の企画に活かされることと思います。選考の結果、優秀作品32名の方々に選抜展優秀賞・前田さなみ賞・奨励賞が授与されています。

90回記念  
グッズ

「ちいさくためるエコバッグ」

素材:ポリエステル 1,200円(税込)  
独立展会場にて販売



1955 静岡県生まれ  
1978 武蔵野美術大学卒業  
1979-1981 アフリカ、中東、ヨーロッパ遊学  
1982 独立展出品(以後毎年)  
1997 第65回独立展/独立賞・記念賞受賞・翌年会員推挙  
2001-2002 文化庁派遣新進芸術家海外研修員  
2009 静岡県文化奨励賞受賞  
2014 終わらない旅 中嶋明展/掛川市二の丸美術館



聖カタリナ修道院

## 1 エジプトへの短期留学

2001年文化庁在外研修員としてエジプト、カイロのコプト博物館に短期留学した。1979年初めてエジプトに行った時からずっと気になっている場所だった。コプトとはエジプトに土着したキリスト教のことだが、大きく捉えれば東ローマ帝国ビザンチンの流れに含まれる。エジプト国内には現在でも多くの修道院があり、そのうちの一つシナイ半島の聖カタリナ修道院が所有するキリストのイコンは美術史の中でも貴重な存在だ。

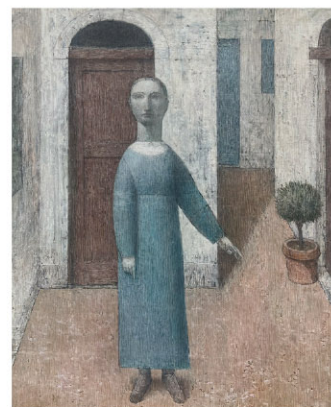
このイコンは6世紀前半に描かれたと思われ、ジョットがルネサンスの端緒を開いた14世紀より800年ほど古いことになる。この絵の成立にはエジプトと言う地域性が大きく関係している。ローマ帝国の属州となっていた1、2世紀頃エジプトで多く描かれたミイラ肖像画の写実性は現在の視点で見ても驚くべきものだが、これらの伝統が初期キリスト教に受け継がれイコンに発展したのではないかと。しかし残念なことに7世紀に勃興したイスラームやその影響下で起こった偶像破壊運動によってその多くは失われてしまった。

ファイユーム  
ポートレート 2世紀聖カタリナ修道院イコン  
「全能者キリスト」  
6世紀前半

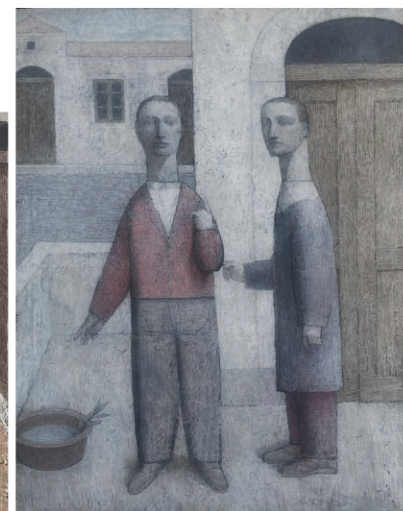
## 2 創作の出発点

そもそもコプトに興味を持ったのはマイノリティとしてのキリスト教徒がどのようにして存在するのか、ということだった。大半がイスラームのエジプトで彼らは自らのアイデンティティを千数百年も保ち続けている。2001年は同時多発テロの起こった年で、アメリカによるアフガニスタン空爆がすでに始まっていた。世界は今以上と言って良いほど緊張し、エジプト滞在中全く日本人観光客には出会わなかった。考えてみればイエスがガリラヤで布教を始めた頃の状況も、根本的には同じようなものだったのかも知れない。

欧米のキリスト教とはほぼ無縁のコプト教徒は、そうした原始キリスト教の面影を最も残す人々ではないだろうか。世界をどのようなものとして捉えるのか、ということが、創作の出発点だとすれば、その体験は自分にとって重要な意味を持っている。



「廻路(カイロ)」F20 2022年 テンペラ、油彩



「この人を見よ」F50 2023年 テンペラ、油彩